

考える力の育成と、 その先に必要なこと

大学や社会での取組を踏まえ、高校の教員はどのように生徒の考える力を捉え、育むべきか。広く発信を続ける安居校長が、何を危惧し、何を大切にしているのか伺いました。

取材・文／堀水潤一 撮影／平山 諭



揺れや迷い、不安や後悔を 伴ってこそその人の思考

最近、私のSNSの投稿に、論理構成も言葉選びも酷似したコメントが並び不思議に思っていました。ある方から「それは生成AIで書かれた文章だ」と教えてもらい、そういうことかと腑に落ちたことがあります。

また、別の方から「今の若い子はLINEの返信の文面を生成AIに考えさせている」と聞き、そこまで来たかと衝撃を受けました。聞けば、自分の生の言葉を使うと、知らず知らずのうちに相手を不快にさせてしまうかもしれず、そうしたリスクを回避するためだそうです。

もともと日本社会には、感情を露骨に見せずオブラートに包む文化がありました。無用な衝突を避けたい気持ちはわかります。だからと言って、それをAIに肩代わりさせるのはどうなのでしょう。そこには、「この表現で本当に伝わるのか」「自分を偽ってはいないか」と自分で何度も問い掛け、迷いながら言葉を選ぶといった、人と人との関係の本質的な部分が抜け落ちているように思います。

確かに、最新の生成AIは、揺れや迷いを含め、感情をもっているかのような人間らしい答えを返してきます。けれど、そうした感情めいたものは、あくまで人間が蓄積してきた膨大なデータの最大公約数に過ぎません。そこには、「この言葉によって誰かを傷つけるかもしれない。関係が壊れるかもしれない」という不安も後悔もありません。対して人間は、迷いながらも判断した結果を、自分のものとして引き受け、生きていかねばならないのです。生成AIというブラックボックスを使い続けることで、人間が本来向き合うべき揺れや迷いが削ぎ落とされているとしたら、なんともいえない違和感を覚えます。

あくまで主体は人間。指示を出すのも判断を下すのも人

教育現場で生成AIを活用すること自体は有効です。膨大な情報を要約したり、整理できていない思いや、形になっていない言葉を整理するための壁打ち相手として使う分には、非常に強力な道具となります。ただ、行為の代替にはなっても、人間の脳の代替にはなりません。あくまで主体は人。意図をもって指示を出すのも、

出てきた回答に判断を下すのも人間です。

その点、AI時代における考える力には、次のようなプロセスが必要になるように思います。

- ①フレームを外し、物事を俯瞰する。「自分が今、頭に描いていることは本当にそうなのか」「根拠はどこにあるのか」など、前提を疑う視点をもつ。
- ②他者とも意見を交わし、ブラッシュアップしながら、その人なりの論理を構築する。
- ③そうして出した判断や結論を自分のものとして、リスクも含めて引き受ける。誰かに何か言われて安易に曲げるのではなく、揺れに耐える持久力をもつ。

人が思考するとは、かように複雑なもの。こうしたプロセスを経ず、生成AIの出す回答を鵜呑みにし、疑うことなく自分の意見としてしまうとしたら、それは思考の主導権を放棄していることと同じです。

生成AIに頼ることは、一見ラクをするようで、実は必要以上の負荷がかかるもの。出てきた回答の真偽を見極め、自分の意図と本当に合致しているのかなどのフィルターを通す行為は、自分でゼロから考えるよりも手間のかかる作業かもしれません。



「恐れずに進め」は、今のドルトン東京学園の合言葉。「自分で選び、自分で判断し、自分で管理する。失敗や間違いを恐れずに、好奇心に素直になろう」と続く。AIに対しても恐れずに進めという思いが!

自由は放任とは違う 結果を引き受ける覚悟が伴う

では教育現場でできることは何でしょう。一つは、生徒自身が考えるまで待つことではないでしょうか。ドルトン東京学園は、「自由と協働」を理念として掲げています。自由という点では、本校にはチャイムも校則も定期テストもありません。大人が考えた鑄型にはめ込めようとせず、自分たちで「学校の当たり前」を考えてほしいからです。

ただし、ここで言う自由は放任とは違います。自分で考え、自分で行動し、その結果を自分で引き受けるということは、実はとてもしんどいこと。実際、入学したばかりの中学1年生に、「何をしてもいいよ」と言うと、最初こそ喜びますが、すぐに「どうしていいかわからない」という壁にぶつかります。「君はどうしたい?」「どう考えるの?」と問いかけても、何をしてもいいかわからず、先生に正解を求めたり、指示を待ったりする生徒も少なくありません。幼児化の傾向を示すのです。

無理もありません。今の社会は、失敗させないようお膳立てをする“先回りの文化”で満ちています。天気予報では「明日は寒くなるので上着を持参ください」と気遣われ、企業や行政からも過剰なガイドが提供される。考える前に答えが用意されている世界では、自分で判断したつもりでも、実際には誰かが提示した選択肢から選んでいるに過ぎないのです。



ドルトン東京学園中等部・高等部 校長
安居長敏

やすい・ながとし ●1982年滋賀県的女子高校で教職をスタート。2002年に退職し、ローカルFM局の設立、運営に携わるほか、個人事業主としてインターネット接続サポート事業に従事。2006年教育現場に復帰。滋賀学園中学校・高校、沖縄アミークスインターナショナル小学校・中学校校長などを経て、2019年ドルトン東京学園中等部・高等部参事(副校長補佐)。副校長を経て2022年7月より現職。学校法人河合塾学園理事。

学びとは非効率なもの 生徒自ら考え動くのを待つ

生徒を、お仕着せの正解へと導くことは簡単かもしれませんが、それでは主体性も考える力も育ちません。学びとは、失敗し、「これが足りなかった」と気づいて初めて得られるもの。それこそ揺れや迷いのなかで時間をかけ、自分なりの考えや言葉に輪郭を与えていくものです。学びとは非効率なものなのです。

生成AIがいつも簡単に正解らしきものを提示してくる時代だからこそ一層のこと、生徒の思考を辛抱強く待つ。もちろん、複数の大人

で見取ったり、適切なタイミングで声をかけたり、居場所をたくさんつくったりしながらです。そうやって、生徒が自分自身で梯子をかけて「登れた」と実感する小さな成功体験を重ねていく。すると「自由ってしんどい」とトーンダウンした時期を乗り越えるときがきますし、学びが自走し始めます。さらに、必要なルールについて議論を始めるなど、自分たちで考え、行動するようになる。この、行動に繋がる点がポイントです。それに関連し、ある動画を紹介させてください。ニューヨークの街角に黒板を設置し、道行く人に「人生で一番後悔していることは何ですか?」と問い掛けたYouTube動画です。「MBAを取得しなかったこと」「俳優の道を追求めなかったこと」など、多くの言葉が並ぶなか、意外にも失敗したことに関する後悔は多くはありません。大半は、「I did not ****や"Not ****ing"。つまり、「やらなかったこと」に対する後悔でした。

何が言いたいかという、ここまで私は「自分の頭で考えること」の大切さを述べてきたわけですが、考えただけではダメで、行動を伴う必要があるということ。生成AIが思考を支援する道具となり得るからこそ、行動することの価値はより高まるはず。主体性は理念ではなく、経験を通じて育ちます。学校はその土台をつくる場所でありたいし、教師は、こうしたnotを外す役割を果たしたいと思っています。だから私たちは生徒にこう伝えます。恐れずに進めと。